

四月のテーマ

喜ばせる生活



え・城谷俊也

間の抜けたおもてなし

2 020年7月24日より東京オリンピックが開催されるのは56年ぶりのことです。

開催決定の決め手の一つとなったのは、招致プレゼンテーションで、日本代表が行なったスピーチでした。とりわけ、滝川クリステルさんが、手話を交えて日本人の「お・も・て・な・し」の心を語ったスピーチは、多くの聞き手に感動を与えました。

「おもてなし」の語源には諸説ありますが、その一つに「裏表なく、見えないところでもきちんとする」ことを意味する、ということも

があります。また、茶の湯から始まり、相手を尊び、喜びや安らぎを与える歓待の所作であるとも言われます。この素晴らしい精神文化が、長い年月をかけて、先達から私たちの心の隅々まで受け継がれているのです。

「訪日外客実態調査(満足度調査編)」によると、日本を訪れた外国人の9割以上が、訪日旅行に対して満足し、再度の訪日を希望して

いるといえます。そして、日本の魅力として、6割強の観光客が、「親切さ」を挙げています。

「道を聞くと、誰もが丁寧に道を教えてくれる」「声をかけても無視する人がいない」など、私たちにとってはごく当たり前の行為でも、旅行者には素晴らしい魅力として映っているのです。

とはいえ、たとえ相手のために行なったことでも、時と場合をわきまえなければ、相手を喜ばせるどころか、かえって不評を買ってしまうかもしれません。

おもてなしには、絶妙なタイミング、すなわち「間」があるので。その「間」とは、人・時間・空間との距離感と置き換えられるでしょう。

Sさんは、倫理法人会活動に参加するようになってから、後始末の大切さを学びました。

ある日、家族でレストランに行った時のことです。家族より一足先に食事を済ませたSさんは、おもむろに、空いた皿やコップを片付け始めました。

空いた皿を重ね合わせて、お店のスタッフが運びやすいようにテーブルの端に置き、また、落ちていたゴミもテーブルの下にもぐって拾い始めたのです。

食事を終え、帰りの車中、妻はとても不機嫌で、返事をしてくれません。そして、ようやく発した言葉は、「ごほん、美味しくなかった」だったのです。妻や子供たちが食事中にもかかわらず、せかさような振る舞いを行なったと思われたことが原因でした。

Sさんはテーブルをきれいにすることが家族やお店に喜ばれると思っただけで行動に移したのですが、それは「間」の抜けた、独りよがりの実践に過ぎなかったのです。

人を尊び喜ばすおもてなしは、型通りのものではありません。相手の気持ちや時期、状況を察して、さりげなく、相手に気遣わずに行動に移すことが、本当のおもてなしといえるでしょう。

相手が心から喜んでくれれば、自身にも、自ずから喜びが沸いてくるに違いありません。